

障害・職業・社会階層
2011年アイルランド国勢調査
個票データの分析

榊原賢二郎

sakakibara_kenjirou@yahoo.co.jp

平成30年11月18日 障害学会大会報告

障害と労働からの排除

社会モデルにおける障害^[1]

… 社会的排除・不利益

とりわけUPIASは労働からの排除をディスアビリティの根本と把握

第一の問い: 各種障害者の就労機会
(既に分析、本日は省略)

↔ 職業の種類も重要

← 社会的不利益・排除と結びつく

職業と社会階層

職業 → 人が得られる **社会的資源**

… 富・威信・権力 etc.

多くの人々が欲するが稀少

社会階層^{[2][3]} 社会的資源を同じぐらい
持っている人々の集団

階層分化 社会が異なる階層に分かれて
いること

… 不平等の一種 ↔ 社会的資源に限定

階層と排除

社会的排除^[4] 社会の諸領域への参加機
会の制約

広義には^[5] 階層問題も射程に

↔ 狭義には著しい階層的不平等と関連

今回の主題… 階層・排除にまたがる

特に「単純労働」の多さはディーセント
ワークからの排除とも言える

データと選択理由

アイルランド国勢調査個票データ

- 障害関連情報を含む
- IPUMS-International^[6] から利用可能
(国勢調査データの国際的データベース)
- 今回は先進国に焦点

2011年4月10日実施、留置調査
※経済危機後

分析対象のケース数

総数 (全データの 約1割を抽出)	47万4353件
----------------------	----------

生産年齢 (15-64歳)	30万3773件
------------------	----------

就労・有効回答	16万3058件
---------	----------

障害関連項目

視覚	0.41%	学習	0.71%
聴覚	0.84%	情緒	0.80%
肢体	0.97%	その他	2.77%
知的	0.23%		

質問文に損傷と活動制限^[7]が混ざる

→ 厳密な比較ではない

↔ 各項目の影響は測定可能

職種分類

1	管理職	6	サービス職
2	専門職	7	販売職
3	技術職	8	工程従事者
4	事務職	9	単純労働者
5	技能工		(elementary)

この下に89の小分類

職種分類

1	管理職	6	サービス職
2	専門職	7	販売職
3	技術職	8	工程従事者
4	事務職	9	単純労働者
5	技能工		(elementary)

この下に89の小分類

職種と階層

管理・専門職

全般として社会的資源(富・威信)に恵まれている可能性

「単純労働」

単純・初歩的な仕事内容としての分類
≠ 完全参加(※選択/傾向)
… 階層問題・排除問題

その他の属性

年齢	平均 40.0 歳 標準偏差 11.2 歳
男性	52.1%
アイルランド語	40.1%
高等教育学位	37.4%
カトリック	84.3%
アイルランド民族	84.4%

職種の分布 (%)

	管理	専門	単純
全体	9.1	19.9	8.7
視覚	8.3	15.3	12.3
聴覚	8.6	13.5	11.1
肢体	7.1	12.7	12.2
知的	3.5	4.0	29.2
学習	5.0	6.8	18.9
情緒	6.2	16.7	10.7
他	8.6	19.8	9.6

クロス集計から

以上の表が示唆する傾向

… 「損傷」を持つ就労者の職種

- 管理・専門職は全体平均より少ない
- 単純労働は全体平均より多い

↔ 年齢や学歴などにも違い

条件を揃えても以上の傾向は現れるか

→ 多変量解析

(ここでは多項ロジスティック回帰)

前提: 起こりやすさの変化の指標

例: サッカーの試合に勝つ見込み

	勝	負	確率
合宿前	1	1	50%
合宿後	3	1	75%

相対リスク: 1.5 (50%→75%)

オッズ比: 3 (1:1→3:1)

- 1より大きい=起こりやすくなった
- まれな現象では両者ほぼ同じ

前提: 起こりやすさの変化の指標

例: サッカーの試合に勝つ見込み

	勝	負	確率
合宿前	1	1	50%
合宿後	3	1	75%

相対リスク: 1.5 (50%→75%)

オッズ比: 3 (1:1→3:1)

- 1より大きい=起こりやすくなった
- まれな現象では両者ほぼ同じ

参考：就労可能性のオッズ比

就労中=1、性・年齢のみ統制

視覚	0.58	学習	0.50
聴覚	0.73	情緒	0.23
肢体	0.21	その他	0.48
知的	0.36		

全て有意、1より小さい

→ディスアビリティの存在を立証

この差を度外視した時、職種面で更なる

相違が残るかどうかが今回の課題

多項ロジスティック回帰分析

人々の職種 ← 多くの要因が影響

… 身体的条件・性別・学歴 etc.

→ それぞれの要因のオッズ比を推定

ここでは職種は9種類(大分類)

→ 単純労働と他の職業のいずれを選ぶかに注目。特に以下

- 管理職:単純労働
- 専門職:単純労働

オッズ比 (上記属性を投入、略)

	管理:単純	専門:単純
視覚	0.85	0.77
聴覚	0.73 *	0.77
肢体	0.69 **	0.70 **
知的	0.53 *	0.24 **
学習	0.45 **	0.40 **
情緒	0.62 **	0.71 **
他	1.22 **	1.02

* < 5%, ** < 1%

考察(1)——全般的な不利

既に就労機会に有意の差

↔ 職種でも全般的に不利

… 単純労働が多く管理・専門職が少ない
(一部係数は有意ではないが1より小)

単純労働が多いことは、ディーセント
ワークからの排除を示唆

管理・専門職の少なさ → 階層問題

考察 (2)——種別間の相違

ただし種別により状況は著しく異なる
障害者を一括して語ることは不可能

特に知的・学習障害の不利が顕著
管理・専門職における知識の重要性
cf. 学歴との関連

考察 (3)——蓄積的排除

その他のより単純なモデルも検討

- 性・年齢・身体条件 → 職種
- 性・年齢・身体条件・教育 → 職種

知的・学習障害の不利は前者で大きく
(例: 知的障害・専門 0.15→0.46)

不利益の複層化^[8]・蓄積的排除^[9]を示唆
知的障害 → 教育の不利 → 職業の不利
他の先天性障害者にも妥当する可能性

文献(1)

- ① UPIAS and DA(1976), *Fundamental Principles of Disability*, London: UPIAS and DA.
- ② 竹ノ下弘久 (2013) 『仕事と不平等の社会学』 弘文堂。
- ③ 富永健一 (編)(1979) 『日本の階層構造』 東京大学出版会。
- ④ 岩田正美 (2008) 『社会的排除』 有斐閣。
- ⑤ 榊原賢二郎 (2016) 『社会的包摂と身体』 生活書院。

文献 (2)

- 6 Minnesota Population Center (2017), *Integrated Public Use Microdata Series, International*, <https://doi.org/10.18128/D020.V6.5> .
- 7 WHO(2001), *International Classification of Functioning, Disability and Health*, Geneva: WHO.
- 8 星加良司 (2007) 『障害とは何か』 生活書院。
- 9 小松丈晃 (2003) 『リスク論のルーマン』 勁草書房。